The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	京の伝統と現代の祈り
Author(s)	上田, 香
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71209
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

京の伝統と現代の祈り

上田　香　嵯峨美術大学

はじめに

出展作品は，「現代の祈りのかたち」をテーマに，作者が学術研究を行なってきた技術の異なる２つの伝統工芸「丹後縮緬」と「京友禅」を組み合わせることにより生まれた作品である。

作者は，昨年から伝統染織工芸の「丹後縮緬」を研究する中で，当該地域で用いられている様々な技術に出会った。丹後地方では全国の着物用白生地の約７割，京都府内で実際に織られている織地（広幅を含む）の約７割が生産されており，有名な縮緬以外に特徴のある企業も多い。

今回の展示テーマを表現するために，「光」をサブテーマとしたいと考え，金を使った作品を企画した。

融合させた２つの技術

丹後縮緬の中でも，民谷螺鈿で生産されている「螺鈿織り」は，薄く加工された貝殻の裏の美しい柄をズレ・ねじれなく織り上げる特殊な技術で，主に高級帯に用いられてきた。その工程は，特殊な和紙の上に金で下書き線を描き，その上から螺鈿を特殊な糊を用いて貼り付けて行く。その後，熱圧を加え，定着させた後，京都市内の職人の手により引き箔加工され，また，民谷螺鈿に返される。その引き箔をズラさす，ねじらず，潰さずに織る特別な技には，織り組織と機械の改良が必要であった。現在の社長・民谷共路氏の先代・民谷勝一郎氏が1979年に完成させた技である。昔から，螺鈿を織り込む技術は西陣織でも用いられていたが，民谷織物の特徴は，広幅の生地作りが可能で，海外高級アパレルメーカーへの販路開拓を通じてのオリジナリティー溢れる生地の開発にある。

一方，「金彩友禅」も，長い歴史を有する京都ならではの技法で，20程ある京友禅の工程の中でも，いわば最後の装飾工程と言える技術である。現在でも多くの伝統工芸士の方が制作されている。作者は５年程前に京都手描き友禅協同組合が主催する工程講習会に参加し，金彩が多くの京友禅工程の最終段階の技術であることから，友禅染め以外の用途に使用できる可能性を感じた。その後，シルクスクリーンやデジタルプリント等で金彩とのコラボデーションを試行し，現在に至る。また，金彩職人の方が美しい曲線を作り出す姿，黙々と作業されている姿に「祈り」を感じ，作品で表現したいと考えていた。

一方，「螺鈿織り」も，作業の積み重ねから生み出され，再度描かれる模様はいわば「絣」の様な柔らかな動きを生み出す。

この２つの技術を融合させることによって，「光」を表現することを試みたのが出展作品である。「光」を祈りの対象と考え，人の手による「光」を「金彩」で，自然光を含めた外部からの「光」を「透過性のある布（オーガンジー）」を使うことで表現した。

織り作業自体が，「祈り」にも似た繰り返し行為であり，日本では「鶴の恩返し」の昔話があるように，まさに「祈り」につながる技である。

作者自身，学生時代に織り作業に多くの時間を費やした経験があるが，作業中は神経を使うが，その時間は心落ち着くものであった。

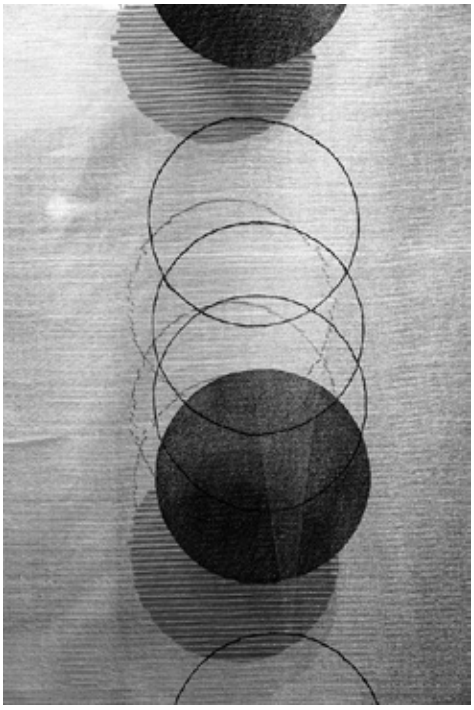
今回は，職人の方々の美しい手わざの連続と積み重ねにより，「光」×「祈り」の新たな造形美を生み出せたと考えている。

今後の展開

制作以前から，個人のアート作品（鑑賞作品）の制作にとどまらず，異業種のコラボレーションによる新技術を製品に繋げたいと考えていた。伝統工芸を着物以外の用途に使用する提案は，着物文化の衰退が避けられない今の時代において，伝統工芸を維持保全するために必要不可欠であると思量する。

「螺鈿織り」は主に帯地に使われていたため，特殊な和紙の表面に螺鈿加工等が施された引き箔を使用することが多い。従って，裏側がしっかりと織られている必要があり，厚みがあり，透け感がない。織り組織としては，いわば二重構造になっており，表面には経糸をあまり使わず，裏面に多くの糸を使うため，表は経糸がほぼ見えないが，裏には多く見える構造になっている。

今回新しく作り出した織り構造は表側だけの構造を使用し，裏側は使わない。それにより，透け感のある布がそのまま織り上げられ，透明感がありながらも安定性がある。この構造は今回使用したオーガンジーのような薄い布を引き箔にするだけでなく，ビニールやフィルム等の他の透け感のある素材へ応用でき，光を通すインテリア素材への展開が可能である。すなわち，経糸にモノフィラメント等の透明な素材を使用すると，一層透明感の高い織物を作る事が可能となる。現在は，ビニール等の透明な材料の選定，素材への金彩加工の試験を実施しており，近いうちの商用化を計画している。

今回，作品展示と合わせて，制作過程を嵯峨美術大学松本泰章教授に記録していただき，イメージ音楽と共に展示させていただいた。作品の世界観を伝えるだけではなく，布の新たな可能性を考えさせて頂き感謝している。

制作過程および作品
（記録映像 light and light より）